

釜石には希望がある。でも、もっと、あるはずだ。

－「希望学釜石調査シンポジウム：釜石に希望はあるか」での報告要旨－

橘川 武郎（きっかわ たけお）
東京大学社会科学研究所教授

【シンポジウム「釜石に希望はあるか」】

2007年3月3日、釜石市の市制施行70周年を記念して、東京大学社会科学研究所希望学プロジェクトの「希望学釜石調査シンポジウム：釜石に希望はあるか」が、釜石市民文化会館で開催された。このシンポジウムで配られた『希望学釜石調査中間報告』のなかで、プロジェクトリーダーの玄田有史は、「釜石の希望は点在していて、まだつながっていない。希望は人と人との関係のなかにしか生まれえないから、大事なことは、どんなに苦しくてもパスをつなぎ続けることだ」、と書いた。これを受けて、シンポジウムの冒頭、釜石調査の概要について報告した中村尚史は、①ネットワーク形成に欠かせないものは何か、②地域における希望の共有には何が必要か、③固有の歴史・文化・産業・環境を希望の再生にいかにつなげるか、という三つの問題を提起した。

中村尚史の問題提起を受けて、「希望学釜石調査シンポジウム：釜石に希望はあるか」では、中村圭介・辻田素子・大堀研・橘川武郎の4名が希望学釜石調査に関する中間報告を行い、それに対して、竹村祥子・遊佐俊一・佐々隆裕の3名がコメントを加えた。この小稿は、シンポジウムで筆者（橘川）が行った報告の要旨を書きとめたものである。なお、文中では、敬称を省略させていただいた。

【なぜネットワークがつかないか】

中村尚史の①と②の問いに答えるためには、釜石でネットワークがつかないのはなぜかを明確にする必要がある。その理由は、皮肉なことに、キープレーヤーがあまりにも英雄的に行動し、それが各々成果をあげているために、お互いにかかわりあう必然性が小さい点に求めることができる。

希望学の釜石調査を行った東京大学社会科学研究所を中心とするメンバーは、これまで、釜石のキープレーヤーの発するエネルギーに圧倒され続けてきた。2006年9月に実施した合同調査の際には、一人ひとりのメンバーが「自分は今日のインタビューで、こんなにすごい話を聞いてきた」と興奮して口々に話すため、宿舎となったホテルは、蜂の巣をつついた状態となった。

釜石市は、岩手県と協力して、新日本製鐵釜石製鐵所が高炉を停止した1989年以降、27社もの企業の誘致に成功した。そして、そのことによって、辻田報告が強調したように、約2000名に及ぶ製造業での雇用を創り出してきた。

誘致された企業は、技術力を生かした新製品開発と、独自の（新日本製鐵から独立した）販路の確保に、全力をあげてきた。その結果、中村圭介報告が強調した、製造業の産業構造転換（鉄鋼から一般機械へ）の中心的な担い手となった。

新日本製鐵は、高炉を停止したにもかかわらず、釜石製鐵所を閉鎖することなく、高級線材を生産し続けてきた。これは、アメリカのUSスチールなどでは、考えられない決断

である。そもそも、3 交替 24 時間労働をいとわない風土、24 時間 365 日稼働が可能な港湾、他の企業も利用できる土地・工業用水など、新日本製鐵が蓄積してきた産業インフラがあったからこそ、上記の企業誘致は実現したのである。

このように、釜石のキープレーヤーたちは、まさに英雄的とも言えるほど奮闘し、それぞれに成果をあげてきた。奮闘するかれらは、あまりに忙しすぎて、お互いにかかわりあう余裕が十分にはなかったのである。

【機会損失を直視する】

キープレーヤーたちの奮闘ぶりをみれば、「釜石には希望がある」ことは明らかである。しかし、ここで銘記すべき点は、「釜石には希望がもっとあるはずだ」ということである。

セブン・イレブン-ジャパンとイトーヨーカ堂からなるセブン&アイグループを小売業における日本のトップカンパニーにおしあげる原動力となったものに、POS (Point of Sales) システムがある。コンビニなどのレジでよくみかける、商品に付されたバーコードの情報を読み込む仕組みのことである。これによって小売店は、売れ筋商品を的確に把握することができ、それに見合った品揃えをすることによって、収益を増やすことが可能になる。こうして、POS システムをいち早くとり入れたセブン&アイグループは、飛躍をとげたのである。

ただし、ここで忘れてはならない点は、POS システムには、一つの落とし穴があることである。それは、売れ筋商品はつかめるが売りそこなった商品はつかめない、難しい言葉で言えば機会損失を把握できない、という落とし穴である。機会損失とは、買う側に買う気があり売る側に売る気があるにもかかわらず、売る側の事情で取引が成り立たないために生じる売上げの減少のことである。POS システムでは、買い手が求めているものの、売り手がもともと店頭においていない商品については、その価値を知ることができないのである。

個々のプレーヤーが奮闘するものの、つながりが十分ではない釜石のネットワークにおいても、機会損失が生じている可能性は高い。例えば、SMC をめぐる取引について、それがあてはまる。SMC は、高炉停止後釜石に誘致された企業の代表格であり、雇用創出の最大の貢献者でもある。我々が行ったインタビューでは、その SMC について、地元釜石での取引に熱心でないとの声が強かった。ところが、辻田報告が明らかにしたように、SMC 自身は、地元企業への発注をふやしたいという意向をもっている。SMC 側に発注する気があり、地元企業側に受注する気があるにもかかわらず、ネットワークが十分につながっていないため、機会損失が生じているのである。この機会損失が取り除かれれば、釜石において製造業の面的展開が可能になり、釜石における希望は、新たなステージに到達することであろう。

【ネットワークがつながらないもう一つの理由】

じつは、釜石のネットワークがつながらないことには、もう一つの理由がある。それは、人口 5 万人未満の釜石の範囲内でネットワークを完結させることには、そもそも無理があるという理由である。釜石のネットワークが有効に機能するためには、ネットワークの範囲をより広域に拡大して、釜石の内部では不足する要素を取り込んでいかなければならない。

釜石において製造業の面的展開を真に実現するためには、関東自動車工業の工場等が立地する北上川流域の県央部との連携が、決定的に重要である。岩手県内の他の各港（大船渡港・宮古港・久慈港）が軒並み取扱貨物量を減らしているなかで、釜石港のみが取扱貨物量を維持しているという、ここ十数年の実績は、この連携がすでにある程度実績をあげていることを示している。仙人峠道路の開通、釜石港公共バースの増設、湾口防波堤の概成という3点セットが出揃う2007年は、釜石と県央部との産業面での連携が飛躍的に強化される画期となるであろう。関東自動車工業岩手工場の設備増強も、この連携強化に追い風となる。

釜石の製造業の面的展開については、もう少し視野を広げると、さらに大きな構図がみえてくる。自動車の国内需要は頭打ちだと言われるが、ディーゼル車だけは例外である。燃費が良いためCO₂（二酸化炭素）排出量削減に効果的なディーゼル車は、今後、日本でも売行きを伸ばす可能性が高い。ヨーロッパでは、すでに市場の過半がディーゼル車で占められている。問題は、渋滞が激しく、ゴー・ストップを繰り返す日本の交通事情のもとではディーゼル車の走行性能を十分に発揮できない点にあるが、この点も、北海道や東北ではそれほど深刻ではない。そうであるとすれば、自動車メーカーが近未来に北海道や東北でディーゼル車を製造する工場を新設することは、大いにありうる。その場合には、自動車用高級線材の北日本における生産拠点である新日本製鐵釜石製鐵所の役割が、にわかにクローズアップされることになる。釜石のネットワークの広域的な展開は、「釜石製鐵所ルネサンス」をもたらすことさえありうるのである。

ネットワークを広域化することは、製造業だけでなく、釜石の第3次産業にとっても、重要な意味をもつ。2004年における釜石の従業者数の産業別構成比をみると、製造業が25%であるのに対して、第3次産業は約60%に達することがわかる。釜石の経済活性化の鍵を握るのは第3次産業だとさえ言えるわけであるが、第3次産業を活発にするためには、ネットワークを広域化し、外部からの観光客・訪問者を増加させる必要がある。

もちろん、最近注目されているコンパクトシティの構想は、釜石にとっても役に立つ。全国に散った釜石勤務経験者を呼び戻し居住者をふやす構想は、ある程度成果をあげるだろう。しかし、コンパクトシティの柱となる「まちなか居住」や「中心市街地のにぎわい」を本格的に実現するためには、一定規模以上の人口および都市機能の集積が必要であることもまた、冷厳な事実である。その意味で、コンパクトシティ構想が威力を発揮するのは、県庁所在地かそれと同等以上の都市に限られるであろう。いまのところ、コンパクトシティの全国的典型が青森、福島、富山、長野、神戸などであることは、それを明確に示している。

全国的にみて、にぎわいをみせている商店街は、必ず人口増加地域か観光地かに立地している。釜石の場合、人口増加には限界があるため、商店街の活性化のためには、ネットワークを広域化し、外部からの観光客・訪問者を増加させるしか、方法がないのである。

【広域ブランドの中でこそ生きる釜石ブランド】

観光客を増加させるうえでヒントとなるのは、釜石を訪れる観光客数が周辺5市（花巻・遠野・大船渡・陸前高田・宮古）のそれより少ない事実である。このことは、けっして悲観すべき材料ではない。むしろ、将来への活路を開く楽観材料だとみなすべきである。と

言うのは、同じ三陸沿岸に位置しながら大船渡・陸前高田・宮古より観光客数が少ないということは、「三陸の釜石」のイメージを鮮明にすることができれば釜石を訪れる観光客は増加する可能性が高いということであり、同じ銀河ドリームライン沿線に所在しながら花巻・遠野より観光客数が少ないということは、「銀河ドリームラインの釜石」というイメージを打ち出すことができれば釜石をたずねる観光客が増える可能性が大きいということだからである。

三陸沿岸は、隆起海岸とリアス式海岸で有名な、日本を代表する観光地の一つである。岩手県の久慈から釜石を経て宮城県の気仙沼まで約 180km にわたって続く「コースト 180」と呼ばれる美しい海岸は、その全体が陸中海岸国立公園に指定されている。一方、銀河ドリームラインは、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』のモデルとなった岩手軽便鉄道を継承した、JR 釜石線につけられた愛称である。銀河ドリームラインは、宮沢賢治の故郷である花巻、柳田国男の『遠野物語』で知られた民話の里・遠野、「鉄と魚のまち」釜石を結んでいる。つまり、釜石は、三陸海岸と銀河ドリームラインという二つの観光ルートが T 字型に出会う、交点に位置する町ということになる。このことは、「銀河鉄道が三陸の海に出会う町・釜石」というブランドイメージをポピュラーなものにすれば、釜石を訪れる観光客が急増する可能性があることを示唆している。

【釜石のストーリー性】

釜石ブランドを広域ブランドと結びつけ、「三陸の釜石」、「銀河鉄道の釜石」としてのイメージを前面に出す場合には、他方で、周辺の市町村に埋もれることがないように、釜石の特徴や独自性をいかにアピールするかが問題になる。しかし、この点については、あまり心配はいらない。釜石には、観光資源やストーリーが豊富に存在するからである。

「希望学釜石調査シンポジウム：釜石に希望はあるか」で上映された短編ドキュメンタリー「釜石に吹く風」のなかで、地元の中学生は、釜石が好きな理由として、「山と川と海がそろっている」、「食べ物と水がおいしい」、「風が耳もとを吹き抜ける」、「鉄づくりの歴史がある」、「人がやさしい」などの点をあげた。たしかに釜石には、おいしい水産物や水が豊富であるし、その水で作ったおいしい酒もある。全国有数の規模を誇るウインドファーム（集合型風力発電施設）があるし、産業観光の対象となる鉄の歴史館・釜石鉱山・橋野高炉跡なども存在する。銀河ドリームラインの各駅には宮沢賢治にちなんでエスプレント語の別称がつけられているが、釜石駅の別称が「ラ・オツェアーノ（大洋）」であることからわかるように、釜石には、花巻や遠野にはない海がある。そして、釜石では、大船渡・陸前高田・宮古に比べて、ものづくりに打ち込む人々の営みが活発である。

大堀報告が強調したように、釜石の発展にとって、自然と工業とを統合して、いかに明確な町のイメージを打ち出すかは、きわめて重要な課題である。そのイメージは、さしずめ、「第一級の自然のなかでの第一級のものづくり」ということになろう（これは、シンポジウムの冒頭で中村尚史が提起した③の問題への解答ともなる）。自然と工業とが文字通り共生している釜石は、熊本県の水俣とともに、日本を代表するエコタウンになりうる可能性をもっている。

今から 150 年前、大島高任は、美しいがしかし厳しい釜石の大自然のなかで、わが国初の洋式高炉を立ち上げた。この初めの一步は、日本の近代化全体の大きな礎となった。そ

れ以来釜石は、大火、津波、艦砲射撃、再度の津波、高炉停止などの幾多の苦難に遭遇しながらも、「第一級の自然のなかでの第一級のものづくり」という基本線を貫いてきた。釜石の歴史から一編の大河ドラマを織り成すことは、それほど難しいことではあるまい。それに対して、全国の他の地方小都市のなかから、釜石ほどストーリー性に富んだ町を見出すことは、容易ではなかろう。

【コーディネーターとストーリーテラー】

ここまでの議論から導かれる結論は、釜石には、今、コーディネーターとストーリーテラーが求められているということである。

コーディネーターの役割は、釜石のネットワークをつなげ、それを外へ広げることにある。コーディネーターには、「内と内」、「内と外」の両方を接合することが求められている。

ストーリーテラーの役割は、釜石で展開されてきた、そして今も展開されているストーリーを、ドキュメンタリー、小説、詩歌、絵画、写真、映画、音楽など形で具象化することにある。花巻の宮沢賢治、遠野の柳田国男に比べて、釜石の井上ひさしの仕事は、未完のままである。

コーディネーターにしても、ストーリーテラーにしても、それを一人で担うのは、困難かもしれない。複数の人々の共同作業が必要になるだろうが、そのメンバーのなかに若い世代が含まれることが望ましい。「釜石に吹く風」のなかでの中学生による的を射た発言は、釜石における若い世代の活躍を予見させる。

【希望学釜石プロジェクトは終わらない】

「希望学釜石調査シンポジウム：釜石に希望はあるか」は終わった。しかし、東京大学社会科学研究所の希望学釜石プロジェクトは終わらない。

今回のシンポジウムで中間報告を行ったのは、地域振興政策調査班のなかの地域企業調査グループと環境行政調査グループのメンバーだけである。同班には、このほか、漁業経済調査グループと「行政と市民」調査グループ、スポーツ振興政策調査グループが存在する。さらに、地域振興政策調査班のほかにも、新日本製鐵釜石製鐵所調査班、歴史文化研究班、社会調査班、地方政治調査班、そして総括班が、活動している。

今回のシンポジウムで中間報告した地域企業調査グループや環境行政調査グループのメンバーも、自分たちの意見を言いつ放しというわけにはゆくまい。東京大学社会科学研究所の希望学釜石プロジェクトは、まだまだ道半ばなのである。

(2007年3月6日脱稿)